松坂屋上野店の歴史

平成26年3月1日(土)→5月27日(火)

松坂屋店前美人図(英山)

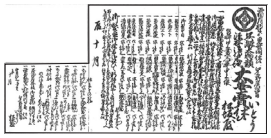
いまなお創業の地で営業を続ける松坂屋上野店の歴史は、明和5(1768)年に名古屋の伊藤家11代祐恵(すけよし)が江戸の松坂屋を買収し、「いとう松坂屋」の看板を掲げたときに始まる。以後、江戸の大火、天保の改革、安政大地震、上野戦争など天災や施政に翻弄されながらも、着実に地歩を固めていった。明治後期に呉服店から百貨店へと業態転換したのちも、関東大震災、東京大空襲などの災害に直面したが、次々と新機軸を打ち出し、困難を乗り越えていった。

本年3月、南館が閉鎖となり、3年後の平成29年に複合型高層ビルに生まれ変わる。

◉江戸へ進出

明和5(1768)年、名古屋の伊藤屋は、江戸の盛り場・上野広小路にある松坂屋を居抜きで従業員ともども4,516両で買い取り、最大の消費地江戸への進出をはたした。このとき松坂屋利兵衛の名義は継承したが、「松坂屋」の商号は「いとう松坂屋」、「三蓋松(さんがいまつ)」の商標は「伊藤丸」に改めた。なお、内部では「鶴は千年」にちなみ「鶴店(つるだな)」と呼んだ。4年後の明和9年2月、江戸の大火(目黒行人坂火事)に全焼したが、直ちに復興工事を行い、同年11月1日に新築開店した。寛政3(1791)年の大晦日に再び類焼するも、翌4年9月に落成、開店した。

安永元年上野店外郭見取り図(円志)


明和9年の引札

◉木綿問屋を兼業

順調に商いを伸ばしていった上野店は、文化2(1805)年、江戸の問屋街・大伝馬町に木綿問屋「伊藤屋」(亀店(かめだな))を開業した。問屋を兼業することで口銭(手数料)を排除し、廉価に販売しようとしたのである。文化10年2月には3度目の火災に遭ったが、同年9月に再建した。翌11年、大田蜀山人が店を訪れ、「新しきみつ葉よつ葉の松坂屋　いとうるほいもふかきはるさめ」と詠んでいる。天保改革さなかの天保14(1843)年に行なわれた12代将軍家慶の日光社参では、御用品の調製を承った。新選組副長・土方歳三が上野店に奉公に上がったのは弘化2(1845)年のことである。

東都大伝馬街繁栄之図(広重)

蜀山人の狂歌

◉安政大地震で全焼

安政2(1855)年10月2日、大地震が江戸を襲った。上野店は従業員に別条はなかったものの、店舗、土蔵、台所、家財は上野町から出た猛火によって焼失した。この大地震の状況をつぶさに検証・記録した『破窓(やぶれまど)の記』は、上野店を「江戸商人第一の損失なり」と伝えている。上野店は、敷地内に炊き出し用の小屋を急造し、罹災者の救済にあたった。安政3年に店舗を再建。このとき江戸中に引札(チラシ)を配って宣伝した。有名な歌川広重の「下谷広小路」(『名所江戸百景』)は、このときの新装開店を描いたとされる。

名所江戸百景(広重)

安政3年の引札

◉上野戦争で官軍の本営

江戸進出からちょうど100年を経た慶応4(1868)年5月15日、官軍と彰義隊の戦いである上野戦争が勃発した。従業員が菩提寺である願信寺に避難したあと、官軍が上野店の2階に本営を構えた。そのためか、広小路一帯が焼け野原になったなか、上野店だけが焼けずに残った。翌々日、官軍・西郷吉之助(隆盛)、熊本藩・細川侯たちが休憩のために訪れ、それを見物に大勢が詰め掛けた。同年(明治元年)12月、明治天皇が御還幸のおり呉服御用達に加えられ、店員が京都に随行した。

上野戦争の西郷隆盛(再現)

上野戦争の弾痕をとどめた看板

◉鉄道馬車が走る

上野店は、上野公園で開催された明治10(1877)年の第1回「内国勧業博覧会」に、呉服を出品し入選に輝いた(第2回・第3回にも出品)。この経験が後の陳列販売方式へとつながっていく。明治15年に鉄道馬車が上野店の前を走るようになり、翌16年には上野、熊谷間の鉄道開通にともない上野駅が開業した。店内でも文明開化をすすめ、明治20年9月に電話、12月にガス灯を導入した。さらに同年6月、売上げ強化をはかるべく初の「夏物売出し」を実施した。明治29年には夏目漱石が、江戸の面影を残す上野店を、「乙鳥(つばくろ)や赤い暖簾の松坂屋」と俳句に詠んでいる。

第二回博覧会一覧之図(右が上野店)

明治中期のチラシ

◉百貨店へ第一歩

明治末期になると、取扱い品目に呉服以外の雑貨などを増やしていった。明治40（1907）年、上野公園で開催の「東京勧業博覧会」にあわせて、店舗の大改装に踏み切った。ショーウインドーを巡らし、ショーケースを並べて陳列販売を開始したのである。江戸時代から続く、座売りからの大転換であった。女性店員を初めて採用したのもこのとき。この販売革新によって売上高が倍増。店内が手狭になったため、明治41年には3階建ての洋館を増設した。明治43年2月1日、株式会社いとう呉服店を設立、上野店はその支店「松坂屋いとう呉服店」となった。

ショーウインドーを巡らした店舗

陳列販売

◉新店舗が完成

第一次世界大戦後の好況下、百貨店業としての基礎を確立した上野店は、新本館の建築に踏み切った。木骨石張り4階建ての店舗は、漱石の義弟・鈴木禎次の設計。大正5（1917）年12月に第1期、翌6年10月に第2期工事が完成した。4階に子供用品・児童遊戯室・多目的ホール・食堂、3階に綿布、家具、貴賓室、2階に絹布・貴金属・休憩室、1階に雑貨・食品・喫茶室を設けた。食品類は2年後の大正8年に売場を拡張し、生鮮以外のあらゆる食を扱う東京で最初の食料品売場となった。大正7年には、わが国初の制服「規定縞」を制定した。

大正時代の上野店

第1期完成のポスター

◉関東大震災で類焼

大正12（1923）年9月1日、首都圏を関東大震災が襲い、東京市の半分が焼け野原と化した。上野店は倒壊こそ免れたものの、翌2日夜の猛火によって類焼した。上野店は、店舗の再建よりも罹災者の救済活動を優先した。まず診療所、呈茶所を設け、15日からは日用品、食料品などの入った慰問袋10万個を配布した。また10月1日からは「東京市設衣類雑貨臨時市場」を各所に設置し、原価に近い値段で売り出した。11月1日、焼け跡にバラック平屋建ての仮設店舗が完成。12月2日には木造2階建ての仮店舗が竣工、開店した。
会社創立から15年を経た大正14年5月1日、各店の商号を「松坂屋」に統一した。

全焼した上野店

商号統一のポスター

◉震災後の新店舗

昭和4（1929）年4月1日、震災後の新店舗が開店した。鈴木禎次が設計した地上7階、地下1階、延べ面積2万5,000㎡のルネサンス様式の本館は、東京の名建築の一つに数えられた。このときエレベーター10台を設置、また民間初の自動電話交換機を導入するなど、設備面でも最先端を行った。わが国初のエレベーターガールが登場したのもこのとき。昭和6年には、食堂のメニューに初の「お子様ランチ」が加わった。中産階級の普段着、庶民のおしゃれ着として親しまれた銘仙の取扱高でも首位を独走し、「銘仙は松坂屋」といわれた。

昭和4年落成の新店舗

エレベーターガール

◉地下鉄と直結

大正14（1925）年11月、上野、神田間に高架が完成し、御徒町(おかちまち)駅が誕生した（このとき山手線が環状線になった）。交通機関との連絡に着目した上野店は、大衆化社会を迎えた昭和4（1929）年12月、店舗と上野駅、万世橋駅を結ぶ顧客送迎バスの運行を開始。翌5年1月には、食料品売場と地下鉄銀座線上野広小路駅の改札口がつながり、地下鉄と直結した最初の百貨店となった。同年6月、食料品の強化をはかるため、本館南側に市場式食料品店「サカエヤ」を開設した。昭和8年には、68年ぶりに浅草寺雷門を再建、寄進した。

上野店と上野広小路駅

食料品店「サカエヤ」

◉戦後の復興

空襲により銀座店、名古屋店、静岡店がほぼ全焼したなかにあって、上野店は戦災による被害はわずかであったが、店舗を工場や事務所として供出していたため、復旧に手間取った。さらに占領下で経済統制が継続されるなど事業活動そのものが制約された。しかし、昭和25（1950）年ごろから徐々に統制が解除され、百貨店本来の姿を取り戻していった。
昭和23年5月、松坂屋のイメージを象徴する宣伝標語を公募、「生活と文化を結ぶマツザカヤ」を選定した。26年には、テーマミュージックの募集を行い、芥川也寸志の曲が当選した。

ライトアップした上野店

昭和 28 年の広告

◉南館を増築

戦後、東京では百貨店の新設、増設が相次ぎ、関西系百貨店の東京進出も盛んになっていた。同業他社との競争が激しくなるなか、昭和29（1954）年、上野店は南館の工事に着手し、昭和31年に4階までが落成した。このとき設置したのが世界初の透明式（クリスタル）エスカレーターである。翌32年には5階以上が竣工し、総面積2万4,200㎡の南館が完成した。百貨店初の別館であった。33年には本館と南館を結ぶ連絡通路「虹の架け橋」が4階と6階に完成し、サトウ・ハチローの作詞で歌になった。昭和32年6月には、シンボルフラワーに「カトレヤ」を制定した。

ライトアップした南館と本館

クリスタルエスカレーター

Matsuzakaya
松坂屋・名古屋店

電話(052)251-1111 www.matsuzakaya.co.jp
【営業時間】本館地下2階～3階、南館地下2階～4階、北館1階は10時→20時　その他のフロアは10時→19時30分　ただし、本館9・10階、南館6・7・10階、北館地下1階で営業時間が異なる店舗もございます。